

## 目 次

### 1. 各専攻・講座の教育・活動報告

看護学専攻・看護学専攻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

医療技術学専攻 医用量子科学講座・放射線技術科学専攻・・・・・・ 7

医療技術学専攻 病態解析学講座・検査技術科学専攻・・・・・・ 16

リハビリテーション療法学専攻 理学療法学講座・理学療法学専攻・・・・ 28

リハビリテーション療法学専攻 作業療法学講座・作業療法学専攻・・・・ 33

### 2. 公開講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

## 看護学専攻・看護学専攻（平成29年度）

国立大学法人に開設された医学系研究科看護学専攻として、「知」の創出と人材育成における社会的役割とともに、わが国はもとより世界をリードできる専門職，研究教育職の育成が求められている。その中で，当専攻では，看護学の発展に寄与する教育・研究活動を目指して，教員の多くが文科省科学研究費を獲得し，重要な研究課題に取り組んでいる。成果は，国内外の学会等での発表の他，トップジャーナルの論文への掲載に向けて投稿，掲載されている。

若手研究者の育成においては，後述のリーディング大学院プログラムの推進，韓国の延世大学との学術交流，タイ王国・チュラロンコン大学ならびにチュラポーン王女医科大学との交流など，その範囲を拡大している。また，学部学生の国際的視野を広めるために韓国・延世大学，中国・上海交通大学，シンガポール・シンガポール国立大学への学生の派遣と受け入れのための短期交換留学制度の維持，充実に努めている。

学内の運営としては，博士後期課程学生の学位授与率の向上を目指して，拡大大学院委員会を開催して，学位審査の手順や準備等について広く情報共有を行い，教員の意識改革にも取り組んでいる。大学院生の獲得のためには，大幸キャンパスで行ってきた大学院説明会に加えて，本学医学部附属病院看護部・看護キャリア支援室と協働で行う附属病院職員対象の大学院説明会も行い，臨床と教育・研究の場である大学とをつなぐための活動も行っている。

H29年度は，看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～の策定について（文科省，H29.10.31）を受けて，学部教育カリキュラムの見直しを行った。併せて，看護教育の将来像を描きながら3年次編入学制度の見直しと助産教育の大学院化についても議論を進め，3年次編入制度については廃止，そして，助産師養成教育については，学部から大学院に移行し，より高度な専門性を発揮できる助産師の養成をめざすこととなった。

### 1. 運営

#### 1) 組織構成

平成24年4月の大学院講座化以降，基本的な組織は2講座制（基礎・臨床看護学講座，健康発達看護学講座）で，大学院教育等の運営にあたってきた。また，兼務の学部教育は，4領域体制で対応し，基礎看護学9名（うち年度末退職3名，後任教員着任2名），臨床看護学10名（うち年度末退職1名），発達看護学8名，地域・在宅看護7名（うち年度末退職1名，後任教員着任1名）の計34名の教員構成で教育研究活動に当たった。

#### 2) 運営状況

看護学専攻では、看護学専攻教授会（毎月 1 回、必要に応じて臨時開催）、全教員による看護学専攻会議（毎月 1 回）を定例開催し、専攻の運営方針、委員会活動、日常の諸問題等への対応を行った。また、大学院委員会（毎月 1 回）を始め、各委員会の活動を通して、専攻内の教育研究活動のより円滑な運営と課題の抽出に取り組んだ。

### 3) 医学部附属病院との連携

医学部附属病院看護部、看護学専攻、看護キャリア支援室の協力体制によりユニフィケーション委員会を定例開催し（毎月 1 回）、看護教育の協働に関する各役割と連携の調整を行った。また、年に 2 回開催する看護専門委員会では看護部（看護部長、看護副部長、看護師長等）、看護キャリア支援室、看護学専攻全教員が一堂に会して、実習等の現状と課題を共有し、うち 1 回は看護部との合同FDを同日開催し、実習指導能力の向上にも努めた。

## 2. 教育活動

### 1) 学生について

学部：平成 29 年 4 月には新入生 81 名（女子 77 名、男子 4 名）が入学した。また、平成 30 年 3 月には、看護学専攻 84 名（編入生 1 名を含む、女子 81 名、男子 3 名）が卒業した。

大学院：平成 29 年 4 月には博士課程（前期課程）18 名（基礎・臨床看護学分野 9 名、健康発達看護学分野 9 名）、博士課程（後期課程）8 名（基礎・臨床看護学分野 6 名、健康発達看護学分野 2 名）が入学した。また、平成 29 年度には、博士課程（前期課程）18 名（基礎・臨床看護学分野 11 名、健康発達看護学分野 7 名）、博士課程（後期課程）6 名（基礎・臨床看護学分野 3 名、健康発達看護学分野 3 名）が修了（満期退学後の学位取得を含む）した。

### 2) ガイダンス

平成 29 年 4 月 3～8 日に学部新入生（1 年生）、新 2～4 年生、大学院新入生（前期・後期課程）に対して専攻共通・専攻別ガイダンスを行った。学習（修）計画、学生生活、感染対策、図書、情報、ハラスメント関係等、一部に倫理審査、国試・就職等に関するガイダンスを行った。

### 3) カリキュラム・資格等

学部：3 年次 4 月に保健師・助産師各選抜試験を行い、保健師選抜は 16 名、助産師選抜は 8 名が合格し、教育の充実に努めた。平成 30 年 2 月に保健師 14 名、

助産師 8 名が、また看護師は 83 名が国家試験を受験し、全員が合格した。

大学院：看護学専攻博士課程（前期課程）のがん看護専門看護師（OCNS）コースは、開設当初の 26 単位から 3P 科目（フィジカルアセスメント、がん病態生理学、臨床薬理学）ならびに在宅がん看護学実習を追加した 38 単位カリキュラムに移行して教育のさらなる充実を図った。小児看護 CNS コースは 26 単位カリキュラムを継続し、今後単位数の変更を含めて対応を検討することとした。平成 29 年 4 月入学者は小児看護 CNS が 1 名のみであり、平成 30 年 3 月修了者はがん看護 OCNS は 0 名、小児看護 CNS については 2 名であった。

リーディング大学院“ウェルビーイング in アジア実現のための女性リーダー育成プログラム”は 5 年目となり、平成 30 年 3 月時点における看護学専攻の履修生は、博士後期課程 2 年次（第 1 期生）1 名、同 1 年次（第 2 期生）2 名、博士前期課程 2 年次（第 3 期生）2 名、同 1 年次（第 4 期生）1 名であった。また、このうち 2 名の履修生は海外国際機関でのインターンシップを経験する機会があった。

#### 4) 国際交流

学部：平成 29 年度についても、日本学生支援機構「海外留学支援制度」からの補助金を獲得することができ、延世大学（2 名）、上海交通大学（2 名）、シンガポール国立大学（7 名：支援を受けたものは 4 名）において病院実習、授業や演習への参加などの短期交換留学（8～10 日間）を行った。海外からの学部生等の受入については、延世大学から 2 名、上海交通大学から 2 名、および、シンガポール国立大学から 5 名が来学し、約 1 週間の病院見学、授業への参加などのプログラムに参加した。ちなみに、これら留学生の受け入れに関しては、学生の国際交流ボランティアサークル SNU-PY が中心となって、多くの学部生を巻き込んだ留学生との文化的交流が行われている。

大学院：名古屋大学-延世大学間学術研究集会は、H29 年度は韓国・延世大学で 11 月 1～3 日に開催された。本専攻からは、2 名の教員と 5 名の大学院生が参加した。そのうち大学院生 2 名は日本学生支援機構の補助を受けて引き続き 5 日間韓国に滞在し、施設・病院見学や研究室訪問を行った。また、H30 年 1 月に、延世大学の大学院生 3 名が来学し、（うち 2 名は日本学生支援機構からの補助金あり）が来学し、研究室訪問、病院等の施設見学を行い本学大学院生や教員との交流を行った。

#### 5) 感染対策

保健学科感染対策委員会の方針に準じながら、看護学専攻における実習時期や内容に合わせて感染予防対策を行っている。専攻内感染対策委員を中心に感染症抗体価検査の実施と結果の確認、ワクチン接種状況の把握、胸部レントゲン写真の結果の把握

等に努め、各実習前にこれらの結果を病院の研修担当部門に報告している。また、実習中も学生に対して感染予防対策の徹底を図るとともに担当教員を中心に学生の健康状態の把握に努め、看護部や病院の感染部門と連携しながら、感染の予防や拡大を防ぐ活動を行っている。学内においても学生に対してガイダンス等で感染予防教育を行うとともに、インフルエンザワクチン接種の勧奨やインフルエンザの感染状況の把握に努めている。

### 3. 研究活動

看護学専攻教員は、各自主要な研究テーマに取り組み、科学研究費等の外部資金を得ながら研究活動をより遂行することに努めた。教授・准教授・講師による研究内容の一部を以下に示す。

太田 勝正 : 看護情報学・情報プライバシーに関する研究, 看護倫理・患者の尊厳に関する研究, タイにおける地域保健活動データベース構築のための研究, 放射線看護・放射線防護に関する研究

山内 豊明 : 看護実践におけるアセスメントの理論構築と実践的研究, 看護ケアについての評価システムならびにその指標の開発, 医療の質・安全ならびにマネジメントに関する研究, 医療専門職間の関係性ならびに相補性についての研究

藤本 悦子 : 看護技術の検証と開発, 睡眠・せん妄に関する研究, リンパ浮腫ケアに関する研究, 組織再生を促すドレッシング材の開発

本田 育美 : 慢性の病をもつ人の健康行動（セルフマネジメントや疾病管理）に関する研究, 高齢者のヘルスプロモーションに関する研究, 看護師の臨床推論に関する研究

大島 千佳 : 看護技術の検証と開発, 睡眠に関する研究, 血液およびリンパに関する研究

安藤 詳子 : がん性疼痛緩和に関する研究, 終末期看護に関する研究, がん患者の症状マネジメントに関する研究

佐藤 一樹 : 緩和ケアの質評価方法の開発, ビッグデータを用いた終末期医療の実態調査, がん・非がん終末期の QOL や医療の質評価, 緩和ケアの提供体制に関

する研究

池松 裕子 : 循環危機患者の自覚症状, クリティカルな状態の患者の QOL, 発達障害のある看護学生の学習支援プログラム開発

中山 奈津紀 : 自律神経活動指標に関する研究、循環器疾患患者の生活支援に関する研究、消化器症状を訴える患者の生活支援に関する研究、周術期におけるせん妄に関する研究、運動と血液循環に関する研究、シミュレーション教育に関する研究

青石 恵子 : 中学生の自殺親和性に関する研究、精神障害者の地域移行支援に関する研究、ナショナルデータベース (NDB) 研究を用いた認知行動療法の実態調査、精神科デイケアにおける窒息のリスクスクリーニング

淵田 英津子 : 認知症高齢者のケアに関する研究、認知症高齢者の介護者支援に関する研究、高齢者ケアの教育方法と評価に関する研究

浅野 みどり : Special needs をもつ子どもと家族の看護、家族の価値観と強みを尊重した養育期の家族への予防的ケア、子どもと家族の Well-being の探求

奈良間 美保 : 子どもと家族主体の在宅ケアを支えるケアモデルと実践推進システムの開発

玉腰 浩司 : 生活習慣病に関する研究、母子保健に関する研究、婦人科疾患・周産期疾患に関する研究

入山 茂美 : 母乳育児に関する研究、産痛緩和ケアに関する研究、思春期の若者の性行動に関する研究、国際母子保健に関する研究

島 明子 : 女性のヘルスケアに関する研究、地域の繋がりを活用した更年期ケア提供モデルの開発、周産期ケアに関する研究

高橋 由紀 : 哺乳探索行動と母子相互作用に関する研究、Skin-to-skin contact に関する実証的研究

梶田 悦子 : 生活習慣病とライフスタイル、エビデンスに基づく保健師活動

榊原 久孝 : 生活習慣病の健康管理、職場の保健管理、物理的因子(振動)による健康影

## 響

前川 厚子 : 外来がん化学療法を受ける大腸がん患者の曝露対策に関する研究, スキンケアと創傷管理に関する研究, ストーマ保有者の QOD と終末期支援教育, ストーマ保有者の QOL と適応に関する研究, 小児期発症の炎症性腸疾患に関する研究, 在宅看護・介護用品の開発と安全性に関する研究

林 登志雄 : 訪問看護と在宅医療の研究, 終末期の医療と看護の研究, 細胞老化と動脈硬化症の研究, 高齢者糖尿病コホート研究と治療ガイドライン作成, 遺伝性(家族性)高脂血症研究, 東アジア女性健康長寿研究

渡井 いずみ : 産業看護に関する研究, ワーク・ライフ・バランス支援に関する研究, 減量プログラムに関する研究, 保健師活動に関する研究, 地域・職域におけるアルコール対策に関する研究

## 4. 対外的活動

### 1) 国立大学保健医療学系代表者協議会

国立大学保健医療学系代表協議会が平成 29 年 6 月 5 日に, 同協議会看護学分科会が同年 6 月 4 日に, いずれも新潟市で開催された。大学院後期課程における入学定員割れや, 大学院への外国人留学の入学試験等, 各大学で抱える課題について議論が行われた。

### 2) 日本看護系大学協議会総会

日本看護系大学協議会定時社員総会が, 平成 29 年 6 月 19 日に東京で開催され, 高度実践看護師教育課程認定規程の改定などが審議された。

(主任 : 太田 勝正)

## 医療技術学専攻医用量子科学講座・放射線技術科学専攻（平成29年度）

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育と研究の目標は、以下の通りである。

- ・ さまざまな画像診断技術（CT、MRI、X線、核医学装置、USなど）の原理や特性を理解し、安全・確実に機器の能力を最大限発揮できるようにする。
- ・ 治療のため人体に的確に放射線を照射できるようにする。
- ・ 放射線が人体に及ぼす影響について幅広い知識と応用力を身につける。
- ・ 専門知識ばかりでなく豊かな人間性を合わせ持つ人材を育成する。
- ・ 日進月歩する医療分野の進歩を理解し、指導的立場となる医療技術者および放射線技術科学を学ぶ人々を指導する人材を育成する。
- ・ 自ら医療の進歩を創出し世界的な研究の一翼を担うことができる研究者を育成する。

### 1. 運営

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育に関するさまざまな問題、教育研究費の予算配分等の運営は、毎月1回の講座会議、並びに講座教授会の合議に基づいて行われている。

### 2. 教育活動

学部教育：

平成29年度の新入学生は、新1年生が43名、3年次編入者は0名であった。2年生は41名、3年生は44名、4年生は47名（編入生1名を含む）で、4年生は11名の教員のもと、それぞれの研究室で卒業研究を行った。また、3年生以下の学生も12名の教員が指導教員となり、勉学、生活の両面で指導を行っている。第70回診療放射線技師国家試験（平成30年2月22日実施）は4年生43名が受験し、そのうち36名が合格した（合格率84%）。卒業生44名の進路は、医療機関に26名（うち、大学病院10名）、大学院進学が10名、一般企業2名、その他6名であった。学部教育は、専任教員による授業の他に、非常勤講師を招いた特別講義、臨床実習など、将来医療現場で役に立つと思われる教育活動が行われている。また、研究力の強化のため3年後期から卒業研究のための研究室配属を行っている。

大学院教育：

平成29年度は博士課程（前期課程）1年10名、2年15名、博士課程（後期課程）



1 年 2 名、2 年 2 名、3 年 7 名の計 36 名であった。前期課程では 13 名が修士論文を提出し、修士の学位を取得した。社会人 1 名を除く 12 名の修了者の進路は医療機関 11 名（うち、大学病院 6 名）、一般企業 1 名であった。

以下、学生名と修士論文題目を記す。

- 安藤 昂輝 高エネルギーガンマ線の存在する環境で測定可能なエックス線カメラの開発
- 岡田 裕史 頭部スキャニング陽子線治療における各臓器の中性子線量当量推定モデルの作成
- 葛原 弘樹 超音波画像の視認性に影響を与える周囲環境に関する検討
- 国本 啓太 心臓用多焦点型ファンビームコリメータを用いた Tl-201 と I-123 による心筋 2 核種同時収集法に関する研究
- 角 英典 3D-DSA 撮影時の被ばく線量を考慮した最適な撮影法に関する研究
- 中嶋 愛 CdTe 系フォトンカウンティング検出器を用いたマンモグラフィ装置開発における新たな画像作成方法の検討
- 中西 恒平 シリコンフォトマルを用いたヒト用小型陽電子放射断層撮影装置の開発
- 西尾 俊貴 Band-Restricted Estimation の応用による X 線 CT 画像における関心領域内の雑音分散に関する検討
- 廣瀬 融 Monte Carlo 法を用いた電離箱間における線質変換係数の比較
- 本田 将之 [18F]THK-5351 を用いる脳 PET タウイメーキング検査において脳以外の高集積部位からの放射線が standardized uptake value に与える影響に関する研究
- 水野 崇 大型内頸動脈瘤に対するフローダイバータ留置前後の磁気共鳴流体力学解析を用いた体積流量測定
- 矢部 卓也 陽子線照射により生じる水の発光現象を用いた線量分布評価
- 横瀬 翔一 小児放射線治療時における照射野外散乱線による正常組織吸収線量の評価

後期課程では 5 名が博士論文を提出し、博士の学位を取得した。

以下、学生名と博士論文題目を記す。

- 西出 裕子 日本人女性の乳房におけるマモグラフィの撮影条件と被曝線量の評価
- 閻 平 三次元画像における経時差分法の研究
- 小林 貴博 波形解析を用いた飛行時間-深さ方向位置検出型 PET 用検出器に関する

る研究

富田 真司 前立腺がん放射線治療における寡分割照射法の物理的および技術的検討

羽場 友信 モンテカルロシミュレーションを用いた X 線 CT 検査における被ばく線量評価に関する研究

### 3. 研究活動

当専攻の教員は幅広い専門分野を研究領域としているため、個々の教員が独自の研究活動を行っている。一部にグループによる研究活動、専攻以外との共同の研究活動も行っている。以下には各教員の研究領域を示し、外部と協力して実施している研究活動の一部を示す。

池田 充 教授 : 被ばく線量と画質との関係に関する研究。医用画像の画質評価に関する研究。

磯田 治夫 教授 : 磁気共鳴 (MR) を用いた脳機能解析・血流解析 (特に脳動脈瘤)・心筋運動解析に関する研究。サーモサイフォン効果を具備した凍結治療プローブ開発。MR 撮像技術・MR 画像診断ならびに神経系・頭頸部画像診断に関する研究。

今井 國治 教授 : 数理統計学及び情報理論を用いた医用画像の画質評価法の構築。造影剤の薬剤物性及び造影特性に関する研究。

加藤 克彦 教授 : ポジトロン核医学に関する研究。核医学画像診断。甲状腺機能亢進症の  $^{131}\text{I}$  内用療法。 $^{18}\text{F}$ -FDG、 $^{18}\text{F}$ -DOPA、 $^{11}\text{C}$ -choline、 $^{11}\text{C}$ -methionine、 $^{18}\text{F}$ -FLT、 $^{18}\text{F}$ -Na 等を利用した腫瘍 PET/CT に関する研究。 $^{123}\text{I}$ -IMP を使用した SPECT 検査における新しい低侵襲性脳血流定量測定法の確立に関する研究。各種核医学検査における定量測定に関する研究。

島本佳寿広 教授 : 乳腺の画像診断に関する研究。超音波装置のディスプレイの性能および環境が病変検出に及ぼす影響に関する研究。読影環境と疲労度との関連に関する研究。読影医の診断論理の妥当性を検証する研究。

古川 高子 教授 : 放射性同位元素を用いる分子イメージングに関する基礎研

究；(a) 腫瘍イメージングのための分子プローブの開発・評価、(b) 標的アイソトープ治療に向けた分子プローブの開発・評価。

- 山本 誠一 教授 : PET 装置, ガンマカメラ, 複合イメージング装置などの分子イメージング機器の研究開発。放射線治療に関係したイメージングに関する研究。
- 小口 宏 准教授 : 電子線計測法 (水吸収線量計測、相互校正法) に関する研究、ポリマーゲル計測法の臨床応用に向けた開発、呼吸同期放射線治療に関する精度評価、画像誘導放射線治療 (IGRT) に関する精度評価。産業総合技術研究所との共同研究「フィールドにおける高エネルギー電子線水吸収線量校正の不確かさ評価と相互校正手順の標準化」に参画。
- 小森 雅孝准教授 : 陽子線治療における新規照射野形成法の開発。陽子線治療における中性子被ばくに関する研究。高エネルギー X 線治療計画装置の線量分布計算精度の評価。
- 小山 修司准教授 : 診断領域 X 線の計測法の研究。X 線 CT の患者・術者の被ばく線量計測。診断領域 X 線のエネルギー計測。マンモグラフィにおける線量計測。新型マンモグラフィ装置の開発。MR 撮像技術に関する研究。
- 砂口 尚輝准教授 : 生体軟組織を高感度に撮像するための位相コントラスト X 線 CT の開発。蛍光 X 線 CT の開発
- 平野 祥之准教授 : 重粒子線治療における生物学的効果に関する研究。重粒子線モンテカルロ計算における精度の検証
- 川浦 稚代 講師 : 人体ファントム計測システムを用いた医療被ばくの測定・評価。日本人乳幼児人体ファントムの開発。X 線 CT 検査における画質と線量の関係解明。
- 井堀亜希子 助教 : フォトンカウンティング技術を応用したマンモグラフィにおける物質同定に関する研究。
- 福山 篤司 助教 : MR 装置を用いた血管内血流動態の計測精度の検証と改善。

Readout Segmented-Echo Planar Imaging を用いた QSI 解析。  
RESOLVE シーケンスで得られる ADC の精度検証

藤井 啓輔 助教 : X 線 CT 検査における成人および小児患者の被ばく線量評価と放射線防護に関する研究。IVR における患者の放射線防護に関する研究。低線量肺がん CT 検診における撮影条件の最適化に関する研究。

本間 光彦 助教 : 人体解剖実習体の X 線撮影・CT 撮影に関する研究。放射線カウンセリングに関する研究。CR の応用利用に関する研究。放射線治療領域における放射線計測法に関する研究。

米田 和夫 助教 : 一般 X 線撮影検査における平面検出器 (flat panel detector) の被ばく線量に関する研究。

#### 4. 対外的な、または社会に関わりある活動

- 1) 第 70 回診療放射線技師国家試験問題検討会の「基礎医学大要」の科目副責任者として国家試験問題の検討を行った (池田)。
- 2) 公益社団法人日本医学放射線学会の代議員を務めた (磯田)。
- 3) 公益社団法人日本医学放射線学会中部地方会の世話人を務めた (磯田)。
- 4) 日本神経放射線学会の評議員を務めた (磯田)。
- 5) 一般社団法人日本磁気共鳴医学会の代議員を務めた (磯田)。
- 6) 日本低温医学会の理事を務めた (磯田)。
- 7) 国際凍結治療学会 (International Society of Cryosurgery) の会長を務めた (磯田)。
- 8) 日本生体医工学会東海支部の支部理事を務めた (磯田)。
- 9) 日本生体医工学会の代議員を務めた。
- 10) 東海総合画像研究会の世話人を務めた (磯田)。
- 11) 脊椎・脊髄画像クラブの世話人を務めた (磯田)。
- 12) ニューロイメージングカンファレンスの世話人を務めた (磯田)。
- 13) 名古屋大学脳とこころの研究センターシンポジウムの企画に参画するとともに、演者を務めた (磯田)。
- 14) 「ポスト『京』重点課題②『個別化・予防医療を支援する統合生命科学』」諮問委員会 諮問委員を務めた (磯田)。
- 15) 第 18 回国立大学診療放射線技師教育施設協議会に本学代表者として出席した (磯田)。

- 1 6) 第 62 回全国診療放射線技師教育施設協議会に本学代表者として出席した (磯田)。
- 1 7) 第 62 回全国診療放射線技師教育施設協議会役員校の代表者として拡大役員会に 1 回出席した (磯田)。
- 1 8) 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会において、専門委員を務めた (今井)。
- 1 9) 一般社団法人日本核医学会の理事を務めた (加藤)。
- 2 0) 一般社団法人日本核医学会の評議員を務めた (加藤)。
- 2 1) 一般社団法人日本核医学会健保委員会の委員長を務めた (加藤)。
- 2 2) 一般社団法人日本核医学会編集委員会の委員を務めた (加藤)。
- 2 3) 一般社団法人日本核医学会派遣委員 (内科系学会社会保険連合) を務めた (加藤)。
- 2 4) 一般社団法人日本核医学会派遣委員 (外科系学会社会保険委員会連合) を務めた (加藤)。
- 2 5) 公益社団法人日本医学放射線学会の代議員を務めた (加藤)。
- 2 6) 公益社団法人日本医学放射線学会編集委員会委員を務めた (加藤)。
- 2 7) 北米放射線学会 (RSNA) 期間中に行われた、日独放射線交流計画・日独合同幹事会に出席し、第 21 回日独放射線交流計画の事務局長としてドイツの放射線科医と学術・文化交流を行った (加藤)。
- 2 8) 日本核医学会において、理事会、評議員会、健保委員会に出席し活動を行った (加藤)。
- 2 9) 日本核医学会中部地方会の世話人を勤めた (加藤)。
- 3 0) 日本医学放射線学会において代議員会、編集委員会に出席し活動を行った (加藤)。
- 3 1) 日本医学放射線学会秋季臨床大会において、代議員会、編集委員会に出席し活動を行った (加藤)。
- 3 2) 東海核医学セミナーの事務局、世話人を務めた (加藤)。
- 3 3) 東海腫瘍核医学研究会の世話人を務めた (加藤)。
- 3 4) 東海脳神経核医学研究会の世話人を務めた (加藤)。
- 3 5) 東海循環器核医学研究会の世話人を務めた (加藤)。
- 3 6) 愛知診断治療技術振興財団の評議員を務めた (加藤)。
- 3 7) ヨーロッパ放射線学会 (ECR) 期間中に行われた、日独放射線交流計画・日独合同幹事会に出席し、第 21 回日独放射線交流計画の事務局長としてドイツの放射線科医と学術・文化交流を行った (加藤)。
- 3 8) 愛知県放射線科医会常任理事を務めた (加藤)。
- 3 9) 愛知甲状腺研究会の世話人を務めた (加藤)。
- 4 0) 名古屋 PET 症例検討会の運営委員を務めた (加藤)。
- 4 1) ニューロイメージングカンファレンスの運営委員を務めた (加藤)。

- 4 2) 米国核医学会 (SNM) に出席し、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った (加藤)。
- 4 3) ヨーロッパ核医学会 (EANM) に出席し、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った (加藤)。
- 4 4) 北米放射線学会 (RSNA) に出席し、研究発表を行うとともに学術・文化交流を行った (加藤)。
- 4 5) 日本乳腺甲状腺超音波医学会幹事を務めた (島本)。
- 4 6) 医用画像認知研究会の事務局として幹事を務めた (島本)。
- 4 7) 愛知県放射線科医会幹事を務めた (島本)。
- 4 8) 日本超音波医学会委員代議員を務めた (島本)。
- 4 9) 日本医学放射線学会中部地方会世話人を務めた (島本)。
- 5 0) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌 "Radiological Physics and Technology" (RPT) 誌の編集委員として編集に従事した (山本)。
- 5 1) IEEE Nuclear Medical and Imaging Sciences Council の選出委員として委員会の運営に務めた (山本)。
- 5 2) 米国、アトランタで行われた 2017 Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conference のプログラム委員を務めた (山本)。
- 5 3) 高エネルギー研で行われた、International Symposium on Radiation Detectors and Their Uses (ISRD2018) のプログラム委員を務めた (山本)。
- 5 4) 一般社団法人医学物理学会の計測委員として会の企画・運営に関わり、第 115 回日本医学物理学会学術大会の大会長として企画準備を行った (小口)。
- 5 5) 公益社団法人日本放射線技術学会の評議員・放射線治療専門部会委員長として学会の企画・運営に関わり、専門部会 2 回、放射線治療セミナーを 3 回開催した (小口)。
- 5 6) 公益社団法人日本放射線技術学会の第 7 4 回、第 7 5 回放射線治療部会で座長を行った (小口)。
- 5 7) 公益社団法人日本放射線技術学会の第 4 6 回、第 4 7 回放射線治療セミナーで座長を行うとともに、第 4 8 回では電子線相互校正法の講演と実技講習を行った (小口)。
- 5 8) 公益社団法人日本放射線技術学会関東部会の関東 RT 研究会副代表として会の企画・運営に関わり、セミナーを 5 回、シンポジウムを 1 回開催した (小口)。
- 5 9) 一般社団法人医学物理士認定機構の評議員・教育委員・広報委員として会の企画・運営に関わり、医学物理士認定、医学物理教育コース認定を行い、教育講演会を 2 回開催し、「放射線治療品質管理プログラム」についての講演を大阪市で行った (小口)。
- 6 0) 放射線治療品質管理士認定機構の理事として会の企画・運営に関わり、放射線治療品質管理講習会を 2 回開催、認定試験と認定審査を行った (小口)。

- 6 1) 公益社団法人日本放射線腫瘍学会の物理技術 WG 代表として会の企画・運営に関わった (小口)。
- 6 2) 日本放射線治療専門放射線技師認定機構の理事・出版委員・学術委員として会の企画・運営に関わり、認定事業、教育セミナー開催、機関誌発行を行った (小口)。
- 6 3) 長野赤十字病院放射線治療管理委員会の外部委員として2回の会議に参画した (小口)。
- 6 4) 岐阜県立多治見病院放射線治療管理委員会の委員として2回の会議に参画した (小口)。
- 6 5) 国立がん研究センターがん対策情報センターのアドバイザーパネル委員として、放射線治療の安全対策に参画した (小口)。
- 6 6) 東海放射線腫瘍研究会技術部会の幹事として、研究会を4回開催した (小口)。
- 6 7) 東海放射線腫瘍研究会第48回技術部会にて電子線相互校正の実習を行った (小口)。
- 6 8) 平成29年度放射線治療専門放射線技師認定機構のセミナー講師 (電子線計測) を行うと共に認定試験問題の作成、認定試験の実施を行った (小口)。
- 6 9) 日本放射線技術学会の学術委員として研究、教育、学会の企画、提案を行った (小口)。
- 7 0) 日本放射線治療専門放射線技師認定機構統一講習会基礎コース (関東1地区、関東2地区、東海地区) で電子線計測法の講演、計測実習を行った (小口)。
- 7 1) 平成29年度放射線治療専門放射線技師認定機構の認定指導者実機講習会 (キャノンメディカル那須工場) の企画立案を行い、相互校正法の講演および実技指導を行った (小口)。
- 7 2) 医療放射線管理委員会の委員として医用放射線の安全利用と管理にいて参画した (小口)。
- 7 3) 医療用線量等校正部会の委員として高エネルギー放射線のトレーサビリティ管理に参画した (小口)。
- 7 4) Varian Medical Systems の Medical Physics Consultation Program WG の委員として放射線治療の品質管理支援事業に参画した (小口)。
- 7 5) 名古屋陽子線治療センターの治療技術・物理検討委員会委員長を務めた (小森)。
- 7 6) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌 “Radiological Physics and Technology” (RPT) 誌 の編集委員を務めた (小森)。
- 7 7) 東海放射線腫瘍研究会技術部会の幹事を務めた (小森)。
- 7 8) 公益社団法人日本放射線技術学会代議員として、会の運営に参画した (小山)。
- 7 9) 公益社団法人日本放射線技術学会計測部会委員として、会の企画・運営に参画した (小山)。
- 8 0) 日本 CT 技術学会理事として、会の企画・運営に参画した (小山)。

- 8 1) 国際計量研究連絡委員会放射線標準分科会専門委員として、本邦における放射線計量標準の運営に参画した（小山）。
- 8 2) 一般社団法人日本磁気共鳴医学会安全性評価委員会に委員として参画した（小山）。
- 8 3) 日本保健物理学会の編集委員を務めた（川浦）。
- 8 4) 一般社団法人日本医学物理学会の防護委員会の委員を務めた（藤井）。
- 8 5) 平成 29 年 7 月 公益社団法人愛知県診療放射線技師平成 29 年度フレッシューズセミナーにおいて、「胸部単純撮影講座」の教育講演を行った（本間）。
- 8 6) 平成 30 年 3 月 公益社団法人愛知県診療放射線技師平成 29 年度第 4 回研修会において、「運動器の解剖学」の教育講演を行った（本間）。
- 8 7) 公益社団法人日本診療放射線技師会の代議員として会の企画・運営に関わった（本間）。
- 8 8) 公益社団法人愛知県診療放射線技師会の理事として、会の企画・運営に関わった（本間）。

(主任：磯田治夫)



## 医療技術学専攻 病態解析学講座・検査技術科学専攻（平成29年度）

病態解析学講座では、正常ならびに病的状態における生体の諸現象をさまざまな専門分野からアプローチし、得られた情報を解析、統合し、医学ならびに保健学を推進するために有用な生体情報についての学術理論の展開や、新たな技術の開発およびその応用を教授・研究している。平成24年4月には名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）での大学院講座化が実現し、病態解析学講座は新体制のもとで研究、教育の礎を着実に構築してきた。

本講座は、環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学からなる。この6つの学問領域が先端的な研究、学際的な病態解析、技術開発を進めるとともに、指導的医療人として、高度化・多様化する医療の動向を見据え、病態解析学研究を遂行できる能力の育成を推進している。

また、教育の目標としては、社会の急激な変化に対応可能な俯瞰力や独創力に加え、チーム医療の積極的な推進、また産学官にわたりグローバルに活躍できる能力をもった、我が国の未来の保健医療を創る人材の育成を掲げている。

### 1. 運営

本講座は環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学の6つの学問領域からなる大講座であり、運営に関しては領域間の壁をなくして一体化した体制を築いてきた。講座の運営は講座主任（永田）を中心に、全17名の教員が参加する講座会議の審議・決定に従って行われている。講座会議は第1、第3水曜日の12時、ならびに第4水曜日の17時から定期的開催され、必要に応じて臨時に開催されている。

### 2. 教育活動

- 1) 4月に第20期の入学生42名（推薦入学生17名、前期日程入学生25名）を迎えた。第18期の3年次編入生は入学者がなかった。
- 2) 4月3日（月）の新入生ガイダンスには教員と1年生全員が参加し、専攻の教育と学生生活に関するガイダンス、教員の自己紹介と指導教員の確認、学生の自己紹介などが行われた。
- 3) 感染対策

病態解析学講座として、感染対策委員（川村）を中心に以下のごとく感染対策教育を行った。本学では入学時に風疹ウイルス、麻疹ウイルス、ムンプスウイルス、水痘ウイルス、B型肝炎ウイルスに対するワクチン接種を義務づけており、新年度開始時に

おこなわれる1~4年生の各学生ガイダンスの際に、感染予防の意義およびワクチン接種の重要性について指導するとともに各種ワクチンの接種状況を確認した。さらに、4年生の臨地実習前には、全員がワクチン接種および抗体検査を終了し、名古屋大学医学部附属病院での臨地実習受け入れ基準を満たしていることを再度確認した。臨地実習直前におこなわれるガイダンスにおいては、臨床検体を扱う上での感染予防対策実施の意義、標準予防策および感染経路別予防対策の実施方法について指導し、さらに各種感染症診断のための検査方法とワクチン接種の意義についての講義もおこなった。また、病原微生物学実習時における感染防止への心得として、「感染の成立と感染経路」や「滅菌と消毒」について、再度講義をおこなうとともに、初回実習時には衛生的手洗い演習を導入するなど、学生実習における感染予防にも努めた。

- 4) 4月26日(水)には検査技術科学専攻の2年生が中心になって、教員と共に新入生歓迎会を大幸厚生会館にて開催した。
- 5) 5月24日(水)には第17期生の臨地実習を充実させることを目的に、病態解析学講座教員、医学部附属病院検査部の教員および技師との実習前の合同会議(第1回臨床検査専門委員会)を開催した。臨地実習は6月5日(月)から7月28日(金)まで医学部附属病院(検査部・輸血部・病理部)で実施された。今年度より指定白衣が導入された。10月3日(火)に実習後の合同会議(第2回臨床検査専門委員会)を開催し、実習での反省点の確認と来年度からの検体を扱う際のゴーグル着用の導入などについて検討した。
- 6) オープンキャンパス  
8月10日(木)に大幸キャンパスで実施し、申込者数219名に対して来場高校生数は207名であった。検査技術科学専攻の説明、教育カリキュラム、教育の目標と内容、特色と卒業後の進路の説明、卒業生からの講演を企画した。その後、参加者が研究室を訪ね、教員や院生による研究内容などの説明および顕微鏡を用いた観察などを体験した。同様の内容で午前・午後ともに2時間ずつ実施したが、アンケート結果より参加者の満足を確認でき、有意義なオープンキャンパスを実施できた。
- 7) 8月29日(火)に3年次編入試験が実施されたが、出願者はいなかった。
- 8) 8月30日(水)に大学院医学系研究科博士課程(前期課程)の入学試験を実施し、医療技術学専攻病態解析学分野では13名の合格者(全員一般選抜)を決定した。また、8月31日(木)に同分野博士課程(後期課程)の入学試験を実施し、1名の合格者(社会人(他大学教員))を決定した。
- 9) 平成30年1月30日(火)には私費留学生入学試験を実施し、1名の合格者を決定した。
- 10) 平成30年3月には、本専攻の第17期生の42名中41名が卒業した(1名は単位不足のため留年)。そのうち14名については進学【13名が大学院博士前期課程(医学系研究科病態解析学分野)、1名が他教育機関(細胞検査士養成コース)】し、就職希望の27名については大学病院や公立病院、一般病院の検査部門、検査センターおよび民間企業に就職した。大学院医学系研究科病態解析学分野(博士前期課程)の第15

期生の 11 名全員が修了した。本年度の前期課程修了者に社会人はいなかった。また前期課程修了者には本学大学院博士後期課程に進学した者はいなかったが、外部より 1 名（他大学教員）が後期課程（社会人）に進学することとなった。前期課程修了者は大学病院や一般病院の検査部門、検査センターおよび民間企業に就職し、就職率は 100%であった。博士課程（後期課程）では 1 名が修了し、他大学の教員（助教）に採用された。

- 11) 臨床検査技師国家試験に対する準備として、全教員による教育指導と 6 回の模擬試験を実施した。第 64 回国家試験（平成 30 年 2 月 21 日実施）の新卒および既卒者の合格者数は各々、38/41（合格率 92.7%）、2/5（合格率 40.0%）であった。
- 12) 平成 29 年度の教育活動の成果として、（全教員）橋本恵梨華（M2）は第 39 回日本血栓止血学会学術集会 優秀ポスター賞（平成 29 年 6 月 10 日）を、藤岡亮也（M2）は同じく第 39 回日本血栓止血学会学術集会 優秀ポスター賞（平成 29 年 6 月 10 日）を受賞した。藤井亮輔（D3）は第 12 回日本臨床検査学教育学会学術大会の優秀発表賞（平成 29 年 8 月 24 日）および「国立大学臨床検査学系博士後期課程優秀賞」の最優秀賞（平成 30 年 3 月吉日）を受賞した。

### 3. 研究活動

本専攻では 4 月に博士課程（前期課程）に 15 名の第 16 期生、博士課程（後期課程）に 1 名の第 14 期生を迎えた。平成 30 年 1 月 28 日（日）に修士論文発表会を開催し、前期課程第 15 期生 11 名が成果を発表した。平成 29 年 9 月 20 日（水）には後期課程予備審査会（研究発表会）を開催し、1 名が研究成果を発表した。学部関係では 5 月 27 日（土）に、第 17 期生による卒業研究発表会が開催された。以下に各部門における卒業研究発表演題を示す。

【病因病態解析学部門】 指導教員：川部勤 川村久美子 松島充代子

1. 免疫複合体の把持を起点とする免疫応答における CD40 の役割
2. 自己免疫性溶血性貧血の発症機序における CD40 の関与
3. 遺伝的背景が及ぼすアレルギーの病原性についての基礎的検討
4. 在宅医療患者等における基質特異性拡張型□-ラクタマーゼ産生菌の分離率および分子疫学解析

【生体生理解析学部門-1】 指導教員：永田浩三 内仲彩子

1. メタボリックシンドロームのラットモデルにおける乳酸菌 HK L-137 の心筋および脂肪の病態への効果の検討
2. メタボリックシンドロームラット(DahlS. Z- Leprfa/Leprfa)の心臓自律神経活動と病態の関連

**【環境病因解析学部門-1】 指導教員：近藤 高明**

1. Fitbit と ActiGraph による歩数記録の解析
2. Fitbit と SleepScan による睡眠記録の解析
3. 一般健常集団での血清アルブミンの redox 状態と Metabolic risk との関連性

**【病態化学解析学部門】 指導教員：涌澤伸哉 上山純**

1. HepG2 細胞における薬物輸送の相互作用に関する基礎的検討
2. 尿中アクリルアミド代謝物分析法の検討と小児検体への応用
3. 発色試薬を用いた血中酸化型アルブミン測定法の基礎的検討

**【形態情報解析学部門】 指導教員：長坂徹郎 川井久美 橋本克訓**

1. 成熟奇形腫に合併した粘液性腫瘍の免疫組織化学的検討
2. 子宮内膜の性周期における経時的変化についての免疫組織化学的検討
3. 病理組織標本作成過程が組織計測と診断に及ぼす影響の解析
  - 脱水～包埋過程での収縮の検討 -
  - 伸展過程での組織サイズ変化の検討 -
4. 腹膜神経膠腫症は未熟奇形腫に由来する-遺伝学的解析を用いて
5. MEN2A 型 RET 変異を有する甲状腺髄様癌における GFR $\alpha$  4 遺伝子発現の解析

**【分子病態解析学部門】 指導教員：小嶋哲人 高木明 田村彰吾**

1. Protein C 欠乏症患者の PROC 解析
2. プロテイン S 欠乏症の PROS1 遺伝子解析
3. 血友病 A 症例における血液凝固第 VIII 因子遺伝子解析
4. 血友病 B 症例における血液凝固第 IX 因子遺伝子解析
5. アンチトロンビン抵抗性検査法の改良
6. 抗血栓療法患者検体にも適応可能なアンチトロンビン抵抗性解析法の開発  
—検体中に含まれる抗血栓薬の影響とその回避法—

**【生体生理解析学部門-2】 指導教員：平山正昭**

1. 便検体の抽出法の違いによる菌組成の違いについて  
—ショットガンメタゲノムでの解析—
2. パーキンソン病患者における 2%水素ガス吸引時の嗅覚障害改善効果
3. パーキンソン病患者における連続刺激を用いた体性感覚誘発磁界

**【環境病因解析学部門-2】 指導教員：石川哲也 林由美**

1. トロンボモジュリン遺伝子導入が骨髄由来幹細胞の体内動態及び炎症制御に与える影響について

#### 4. 対外的な、または社会に関わりある活動

##### A) 国際交流

開始以来8年目を迎えた延世大学（韓国）との国際交流事業は、11月1～3日に延世大学で行われ、病態解析学講座からは2名の大学院生（上田裕子、坂根寛人）が研究成果について口頭発表と質疑応答を行なった。交流会終了後にさらに11月9日まで日本に滞在し、研究室訪問などを行なった。2018年1月14日から21日まで、延世大学の大学院生2名が本学を訪問し、研究交流を深めた。この交流事業組織委員会には国際交流委員の近藤高明教授と上山純准教授が出席し、企画や運営の役割を担った。

9月3～11日にタイのマヒドン大学アセアン保健開発研究所とチュラロンコン大学の協力のもと、「タイ保健学科医療体験入門プログラム」が実施され、7名の検査技術科学専攻学部生（2年生4名、3年生2名、4年生1名）が短期研修に参加した。研修内容として農村部でのヘルスセンター、郡レベルや県レベルでの病院、在宅医療の現場、国立小児病院、マヒドン大学検査技術科学部、チュラロンコン大学看護学大学院、医学博物館、文化施設などを訪問し、教員や学生の国際交流を行った。

小嶋哲人教授は、7月にドイツ・ベルリンで開かれた第26回国際血栓止血学会（ISTH2017）に出席し、指導大学院生3名（ポスター3題）の発表を指導するとともに、世界の研究者と様々な情報交換を行った。また、11月には韓国・延世大学原州キャンパスで行われた研究交流事業に参加し、指導大学院生の研究成果発表を指導した。また、6月には日本血栓止血学会学術集会（平成29年6月8-10日）を名古屋国際会議場にて主催し、1000名をこえる参加者とともに「血栓止血学の新時代-基礎から臨床への展開」について国内外の研究者と情報交換した。さらに、「脳と血管を守る-脳梗塞値静脈血栓症（エコノミー症候群）」と題した市民公開講座（平成29年6月17日：定員800名）を主催した。

永田浩三教授は、2月に米国Venturaで開催されたThe 2018 Angiotensin Gordon Research Conferenceで指導大学院生の研究発表に同行するとともに、海外の研究者との情報交換を行った。

川部 勤教授と松島充代子講師は、6月18日～6月22日に開催された19th International Conference on Solid-State Sensors, Actuators and Microsystems (Kaohsiung, Taiwan)において共同研究者として1題のポスター発表を行った。ま

た、9月3日～9月6日に開催された Eurosensors 2017 (Paris, France)において共同研究者として3題のポスター発表を行った。

石川哲也教授は、The Scripps Research Institute と T cell receptor transgenic mice (TCR 6C2.36 mice) についての Animal Transfer Agreement を締結し、今後の研究への利用を予定している。

平山正昭准教授は、6月に行われた the 21th International MDS Congress と、9月に行われた 23th World Congress of Neurology にてポスター発表を行った。また、8月に行われた International Society for Autonomic Neuroscience2017 ではシンポジウムで「Gastrointestinal dysfunction in Parkinson's disease」と「Autonomic dysfunction in dementia-overview」について講演した。

川村久美子准教授は、平成25年10月に採択された博士課程教育リーディングプログラム「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラムに協力教員として参加している。プログラム内ではアドミッション・リクルートWGに参画し、6リーディング合同プログラムなどの企画運営に携わることで積極的にリクルート活動をおこない、10月には第2回生プログラム正規生20名を迎えた。また、プログラムの協力教員として、講義グローバルリーダーにおける講師招聘や海外実地研修の企画を行なった。また、平成30年2月におこなわれた海外実地研修I(ミャンマー)の企画運営に参画した。

上山純准教授は、平成29年11月13日～15日に The Institute for Prevention and Occupational Medicine of the German Social Accident Insurance, Ruhr-University Bochum (IPA) (ドイツ)に訪問して試料バンクを見学し、バイオモニタリング国家プロジェクトである German Environment Specimen Bank (ESB) および German Environmental Survey (GerES) に関する具体的な調査の設計や方法等に関して意見交換を行った。

林由美講師は、6月4日-8日に開催された 65th Conference of American Society for Mass Spectrometry (ASMS) および The 4th Annual European Congress of the Association for Mass Spectrometry: Application to the Clinical Lab (MSACL 2017 EU) に参加し、ポスター発表を行った。

## B) 大学間交流

5月15日(月)に神戸で第54回国立大学臨床検査技師教育協議会が開催され、全国20校の代表が参加した。本学からは永田浩三主任が代表として出席した。会長校

である神戸大学の柱本照議長の議事進行で活発な議論が行われ、承合事項として、「大学院後期課程の充足の現状と対策について」、「学生の研究志向を高めるためのカリキュラム上の工夫について」、「研究活動に重きをおいた職務に就いている大学院修了者の割合について」、「卒業研究について、各校の取り組みをお聞かせください」、「侵襲を伴う学部実習について、各校の現状をお聞かせください」、「科研費の審査区分変更への対応について」、「同窓会への勧誘の取り組みについて」、また、協議事項として「国立大学臨床検査学系博士後期課程優秀賞」（国立大学保健医療学系における教育・研究活性化支援試行事業）の継続的な実施について、「国立大学臨床検査技師教育協議会将来計画構想の継続的な審議の是非について」、「Quarter 制の導入状況と課題について」、が取り上げられた。5月29日（月）と12月11日（月）には、日本臨床検査学教育協議会の各々定時総会と臨時総会が東京医科歯科大学で開催され、永田浩三主任が代表として出席し、同協議会の活動状況を把握するとともに、全国の臨床検査技師養成施設の代表と情報交換を行った。

永田浩三教授は、8月に開催された第12回日本臨床検査学教育学会学術大会に参加し、他の養成施設と教育に関する情報交換を行った。またこの期間中に開催された科目別分科会第5回例会に出席し、生体検査学（循環生理、呼吸生理、神経生理、画像検査）の会長として、臨床検査技師業務拡大に伴う指定規則改定への各大学の対応についての意見交換などの議事進行を行った。

内仲彩子助教は、第12回日本臨床検査学教育学会学術大会に参加し、他の養成施設と教育に関する情報交換を行うとともに、科目別分科会第5回例会に出席し、生体検査学（循環生理、呼吸生理、神経生理、画像検査）の副会長（呼吸生理）として書記を担当し、議事録の作成および意見交換を行った。

近藤高明教授は、7月に開催された第63回東海公衆衛生学会学術大会で2名の大学院生のポスター発表の指導と自身の発表を行った。8月に行われた第21回国際疫学会学術集会（WCE2017）では1名の、同月に開催された第12回日本臨床検査学教育学会学術大会では2名の大学院生の発表の指導を行った。さらに2月に開催された日本疫学会学術総会では2名の大学院生の発表を指導した。いずれの研究成果も全国多数の大学と研究機関が参加しているがんコホート研究（J-MICC Study）や複数の大学研究者が共同で実施している北海道八雲町調査から得られたデータ解析に基づくものである。

涌澤伸哉教授は、9月23日（土）～24日（日）に東京女子医大において開催された第41回日本鉄バイオサイエンス学会学術集会で特別講演Ⅰの座長を務めた。

石川哲也教授は、平成29年度から国立研究開発法人日本医療研究開発機構研究費

「肝炎等克服実用化研究事業（B型肝炎創薬実用化等研究事業）」の2つの研究班「イムノ・オミクス研究を基盤としたB型肝炎に対する治療法の開発」（代表：国立国際医療研究センター肝炎・免疫研究センター、考藤達哉センター長）と「獲得免疫反応の賦活化により核内HBV cccDNAを排除する手法の開発」（代表：福井大学学術研究院医学系部門・内科学(2)分野、中本安成教授）に研究分担者として参加し、さらに「実用化に向けたB型肝炎新規治療薬の探索及び最適化」（代表：名古屋市立大学大学院医学研究科病態医科学、田中靖人教授）に研究協力者として参加している。これらの研究班においては、岐阜大学大学院病態情報解析医学、伊藤弘康准教授、熊本大学大学院生命科学研究部消化器内科学、佐々木裕教授らと研究を行っている。また、平成25年度からは、同じく日本医療研究開発機構「再生医療実現拠点ネットワークプログラム」での技術開発個別課題「iPS細胞分化・がん化の量子スイッチング in vivo Theranostics」（代表：名古屋大学大学院工学研究科、馬場嘉信教授）に分担研究機関として、林由美講師とともに参加している。同研究課題においては、京都大学再生医科学研究所、田畑泰彦教授、名古屋市立大学大学院薬学研究科、松永民秀教授らと共同研究を行っている。

川部 勤教授と松島充代子講師は、中部大学応用生物学部山本 敦教授らとともに推進してきた共同研究について、公益財団法人科学技術交流財団の平成28年度研究会支援事業に「肺における血中薬物の吸収・排泄機構に関する研究会」が採択された。この研究会を松島充代子講師は座長として運営した。また、「呼吸を用いる非侵襲的薬物動態解析法に関する研究」（基盤研究(C)研究代表者山本 敦）をこの共同研究チームのもとで推進した。さらに、広島市立大学情報科学研究科式田光宏教授との共同研究について「呼吸器末梢気道でのその場計測を可能にするカテーテルセンサ技術の開発」（基盤研究(B)研究代表者式田光宏）のもと研究推進し、(株)コスモスウエーブも参加する産学連携共同開発事業として現在展開中である。

長坂徹郎教授は、大学院研究、教育の一環として名古屋市立大学病院病理診断部の山下依子准教授と婦人科領域の腫瘍に関する分子病理学的研究を行った。

平山正昭准教授は、順天堂大学医師頼高朝子らと臨床治験 パーキンソン病における水素水多施設共同試験に参加している。平成28年度から革新的先端研究開発支援事業「微生物叢と宿主の相互作用・共生の理解と、それに基づく疾患発症のメカニズム解明」パーキンソン病の起因となる腸管  $\alpha$ -synuclein 異常蓄積に対する腸内細菌叢の関与の解明 代表大野欽司のプロジェクトに参画し、共同研究者の岡山旭東病院・神経内科部長・柏原健一、岩手医科大学医学部内科学講座・准教授・前田哲也、福岡大学医学部神経内科学・教授・坪井義夫と連携し、臨床部門での検体採取を担当し、腸内細菌の解析を行っている。また、第11回パーキンソン病・運動障害疾患コンgresにおいて、「パーキンソン病患者に対する酸化アルブミンを用いたバイオマ



ーカーとしての有用性」について大学院生のポスター発表の指導をした。

川井久美准教授は、8月に開催された第11回日本臨床検査学教育学会学術大会に参加し、指導学部生1名の口頭発表を指導した。平成27年度から「蛍光点滅観察によるRNA1塩基変異の1分子病理診断」に分担研究者として参加し、大阪大学産業科学研究所、川井清彦准教授と共同研究を行っている。この研究成果をもとにキャノン財団研究助成を平成29年度より受けることとなった。

上山純准教授は、平成27年度から名古屋市立大学上島通浩教授とともに環境省の環境研究総合推進費を受け、子どもの殺虫剤曝露状況の評価法開発に現在取り組んでいる。平成28年度 革新的先端研究開発支援事業 「微生物叢と宿主の相互作用・共生の理解と、それに基づく疾患発症のメカニズム解明」パーキンソン病の起因となる腸管 $\alpha$ -synuclein異常蓄積に対する腸内細菌叢の関与の解明 代表大野欽司のプロジェクトに参画し、便中短鎖脂肪酸分析を担当している。

### C) 地域との連携

小嶋哲人教授は、東京開催の第40回シスメックス学術セミナー（平成29年6月3日午後）にて「アンチトロンビンレジスタンス：新しい遺伝性血栓性素因」の講演を行った。また、同日夜（平成29年6月3日夜）名古屋において東海へモフィリアワークショップ2017において、世話人として地域への研究活動の情報提供、啓発活動を行った。さらに、「第5回JSTH教育セミナー 2017.10.29」（平成29年10月29日）で「静脈血栓症-発生機序と分子病態-」の講演を通して、広く日本の血栓止血学研究者への教育として啓発活動を行った。

永田浩三教授は、日本循環器学会社員、日本高血圧学会評議員（学術委員）、日本心不全学会評議員、日本内科学会東海支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。名古屋大学分子細胞循環器研究会の幹事として循環器疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化に尽力した。名古屋大学予防早期医療創成センター教授（兼任）および日本循環器学会東海支部の院内調査に関する派遣医師候補者を務めた。大幸地区産業医として教職員の健康管理に尽力した。名城大学附属高等学校・学校評議員として学校運営および高大接続のために尽力した。

近藤高明教授は、平成14年から愛知県犬山での健康まちづくり推進委員会」の委員として地域の健康増進活動に学術専門家として協力してきたが、平成29年度は犬山市の健康寿命の算定を行った。8月下旬に北海道八雲町で3日間実施された「町民ドック」は多くの大学と町の共同で疫学調査を兼ねた事業であり、スタッフの一員と

して2名の大学院生とともに参加し、その成果を町民の予防活動に還元するよう努めた。また名古屋大学早期予防医療創成センター教授を兼任し、トヨタ自動車の支援をうけて豊田市とともに立ち上げた「豊田健康ナビゲーター倶楽部」の運営活動に参加した。また厚労省が推進している健康保険組合主体の「データヘルス事業」の一つに山田純生教授（理学療法学講座）とともに参加し、企業従業員の健康推進活動を支援した。

石川哲也教授は、日本内科学会東海支部評議員、日本消化器病学会評議員、同東海支部評議員、日本肝臓学会評議員、同西部会評議員として学会活動の活性化に尽力した。

川部 勤教授は、日本免疫学会評議員、アレルギー学会代議員、日本呼吸器学会代議員、日本職業・環境アレルギー学会評議員、日本臨床検査学教育学会評議員研修委員、日本内科学会東海支部評議員、日本呼吸器内視鏡学会中部支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。また松島充代子講師とともに名古屋大学工学研究科西澤典彦教授とOCTによる肺組織の観察システムの開発について共同研究を継続して行った。川部勤教授は、平成30年3月に第27回名古屋呼吸器領域卒後専門教育セミナーのプログラム委員としてセミナーを企画実行した。また、川部勤教授は、日本アレルギー学会・公益財団法人日本アレルギー協会「災害時のアレルギー疾患対策対応・支援活動」災害対策責任者（東海）として東海地区の災害対策に責任を持ち、日本アレルギー協会理事、東海支部支部長・編集委員として第24回アレルギー週間事業「市民公開講座と相談会」を平成30年2月に東海支部事務局代表の松島充代子講師と共に主催した。さらに川部勤教授は東海喘息研究会をはじめとする研究会の世話人として呼吸器・アレルギー疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化、啓発活動の推進に尽力し、平成23年より特定非営利活動法人 中日本呼吸器臨床研究機構の監事、また特定非営利活動法人 愛知県COPDネットワークの監事として機構の運営に関わり、6月9日に知多保健所主催の呼吸教室の講師、10月20日に名古屋市成人喘息教室の講師など地域医療への活動、情報提供、啓発活動を行った。また、川部勤教授は名城大学名古屋ドーム前キャンパスの校医として学校保健事業にも参加している。

長坂徹郎教授は、6月11日には、日本臨床細胞学会東海連合会の幹事として細胞診基礎講習会の講師を担当し、子宮内膜、卵巣の細胞診に関する教育講演を行った。11月11日には日本臨床細胞学会の教育公園において座長を務めた。また、日本病理学会、国立がんセンターがん対策情報センター病理コンサルタントの委託を受け、婦人科領域の病理診断コンサルテーションを行ってきた。

涌澤伸哉教授は、12月17日ウインク愛知（名古屋市）で開催された静岡県立大学薬学部同窓会東海支部主催の薬学セミナーにおいて「食物成分による薬物トランスポ

ーターの機能修飾」について講演を行った。

平山正昭准教授は、名古屋大学予防早期医療創成センター准教授（兼任）としている。全国学会として、日本神経学会、日本自律神経学会、日本末梢神経学会の評議委員を行っている。地域ボランティアとして、日本パーキンソン病友の会愛知県支部の顧問を務め、年4回の地域講演活動、友の会会員旅行、2ヶ月に1回の会報の執筆を継続して行っている。企業協力として、ヤクルト中央研究所とパーキンソン病患者の腸内細菌の共同研究、日内変動を伴うパーキンソン病における皮膚ガスならびに汗、東京堂大学薬学部血液のL-Dopa・L-Dopa代謝産物・揮発性ガス測定をピコデバイス社及び東京大学薬学系研究科角田誠講師と共同研究を行っている。患者団体が主催する日本パーキンソン病コンGRESの開催の運営に参加している。

高木明准教授は、東海 KOAG 研究会代表幹事として東海 KOAG 研究会（平成 29 年 9 月 14 日）を主催し血液検査部門に従事する臨床検査技師の卒後教育に尽力した。

川村久美子准教授は、平成 27 年度採択「在宅医療患者等における多剤耐性菌の分離率及び分子疫学解析（代表 名古屋大学大学院医学系研究科 分子病原細菌学教授 荒川宜親）」に分担研究者として参画し、愛知県下の特別養護老人ホームや高齢者介護老人保健施設の入所者を対象に薬剤耐性菌の保菌率を調査した。この調査は在宅患者が薬剤耐性菌の温床になり得るか否かを解析するための国内初のパイロットスタディであり、在宅患者受け入れの際の急性期病院の感染対策に調査結果を還元できるよう尽力した。また、名古屋大学予防早期医療創成センター准教授（兼任）として参画しており、産学官の連携および融合研究の発展に尽力した。

上山純准教授は、環境省化学物質の人へのばく露量モニタリング調査に関するタスクフォース委員として、事業の設計等について議論した。愛知県衛生研究所運営委員会委員として、調査研究、試験検査等について審議した。日本衛生学会専門職制度検討委員として調査等に貢献した。日本衛生学会評議員と日本医用マススペクトル学会評議員として学会運営に協力した。日本産業性学会の許容濃度委員会にて臨時起案委員として招集され、農薬の許容濃度に関する取りまとめに尽力した。名古屋第二赤十字病院における治験審査委員会にて、外部委員として審議に参加した。愛知県ペストコントロール協会の特殊健康診断に殺虫剤ばく露評価を採用し、その尿中殺虫剤代謝物分析の実施に貢献した。

橋本克訓助教は、愛知県臨床検査技師会・病理細胞検査研究班の班員として活動し、病理・細胞検査部門に従事する臨床検査技師の卒後教育に尽力した。平成 29 年 9 月 30 日、10 月 1 日に開催された第 56 回日本臨床衛生検査技師会・中部圏支部医学検査学会では学生フォーラム、養成校ブースを担当し、学生フォーラムでは本学の学生

と藤田保健衛生大学の学生の指導を行い、養成校ブースでは本学の紹介を行った。10月23日には同研究班主催の基礎講座（テーマ：免疫染色の基礎）を大幸キャンパスで開催し、実務委員を務めた。11月11日には日本臨床衛生技師会と愛知県臨床検査技師会が主催する「検査と健康展」に実務委員として参加し臨床検査の啓蒙活動を行った。また、愛知県臨床検査技師会において平成26年度より病理検査の精度管理を担当しており、平成29年度はHematoxylin Eosin染色の染色サーベイおよびフォトサーベイの実務委員を務め、病理検査部門の精度向上に貢献した。

（主任：永田浩三）

## リハビリテーション療法学専攻 理学療法学講座・理学療法学専攻（平成29年度）

理学療法学は、身体組織および機能の低下、あるいは能力の制限を持ちながらも、質の高い人生を送るために不可欠な医療に関する研究推進ならびに高度専門教育を行う。

そのために、機能不全の原因となる病態や発生機序を生理学的に解明する基礎研究とともに、機能・能力の効果的回復や機能維持、更には疾病・障害の再発予防に関する臨床研究を積極的に推進し、質の高い理学療法の基盤を創造する。

また、学内他専攻はもとより、他大学ならびに海外の学術・研究チームと積極的に交流し、国際的水準で研究推進ならびに後進の指導を行い得る人材の育成に努めるものである。

### 1. 運営

本専攻は、2012年度から大学院の重点化に伴い、リハビリテーション療法学専攻理学療法学講座として組織されている。運営は、全教員（総数9名）による講座会議（毎週水曜日12時から開催）における協議・決定にしたがい進められている。さらに、同じ専攻である作業療法学講座と合同の大学院会議（毎月第1,3水曜日）を行っている。

### 2. 教育活動

学生については、学部においては理学療法学専攻の名称が用いられる。大学院博士前期課程では理学療法学分野、大学院博士後期課程はリハビリテーション療法学専攻が理学療法学領域と作業療法学領域を併せて一講座としているため、便宜上、理学療法学関係と記述している。

#### ○平成29年度の具体的活動内容

学部生としては、4月に保健学科理学療法学専攻第20期生として19名の学部学生を迎え入れた。性別は男子学生14名、女子学生5名であった。選抜方法による内訳は、推薦入学8名、前期日程試験入学11名であった。大学院には、前期課程に10名（一般選抜9名）、後期課程4名（一般選抜1名）が入学した。こうして、理学療法学専攻としての学生数は、1年生19名、2年生23名、3年生26名、4年生21名、大学院博士前期課程リハビリテーション療法学専攻理学療法学分野の1年生10名（一般選抜9名）、2年生9名（一般選抜8名）、後期課程のリハビリテーション療法学専攻理学療法学分野は1年生4名（一般選抜1名）、2年生3名（一般選抜2名）、3年生3名（一般選抜0名）となった。

新学期には4月3日（月）午前中に新入生に対する全体ガイダンス、午後からは作業療法学専攻とともに新入生に対する教務および学生生活ガイダンスを行った。ここでは作業療法学専攻と共同で、全教員との顔合わせも行った。4月6日（木）には新大学院生を対象とした全体ガイダンス、情報関係ガイダンスに続いて、リハビリテーション療法学専攻によるガイダンス、在校生ボランティアからの説明等があった。4月5日（水）午前中に入学式が行われた。4月7日（金）には2-4年生を対象とした在校生ガイダンスを行なった。この在校生ガイダンスでは、共通科目については理学療法学・作業療法学両専攻合同で、専門科目については理学療法学専攻単独で、各学年別に1時間ずつを使い、本年度のカリキュラムの説明、学生生活のルールの再確認を行った。これらにより、本専攻に所属する学部学生、大学院生のすべてに対して、カリキュラムの説明、学生生活のルールの説明・再確認がおこなわれた。説明は主任、教育・FD委員、学生生活委員、授業担当教員が担当した。

4月8日（土）には、専攻内での新入生歓迎会を行った。新2年生が幹事となり、土曜日半日を使い、在校生、新入生、教員が参加し、全員の自己紹介、懇親会（大幸厚生会館）を通じて人間的交流・連携の強化を達成した。

4月中旬から臨床実習Ⅱ、Ⅲが始まる4年生に対し、各教員が臨床実習に必要な項目についての学内実習をおこない、4月24日（月）から実際の医療機関での臨床実習が始まった。この実習は各種疾患を観察し、臨床実習指導者のもとに基本的評価および理学療法プログラムの作成を目的としている。学生は多くの不安を抱きながら、実習先に向かったが、5週ごとの反省会で、種々の問題点などが指摘されながらも、全員無事この実習を終えることが出来た。5年前から開始した臨床実習前の学内実習もあって、各学生とも実りの多い臨床実習を経験できたものと思われた。臨床実習は7月7日（金）に終了した。4年生は7月10日（月）に臨床実習反省会を行ない、7月12日（水）に理学療法セミナーⅡの一部として、実習で担当した患者様の症例報告会を行なった。理学療法セミナーⅡはさらに吸引療法の理論と実際について、非常勤講師とともに看護学専攻教員、理学療法専攻教員らがそれぞれ担当して行った。

また、4年生を対象として地域理学療法学実習が5月30日（火）～6月1日（木）、7月14日（金）～24日（月）の期間、3つのグループに分かれて行われた。地域理学療法学実習は、デイサービスおよび訪問理学療法の実際を見学できる貴重な実習である。

夏季の集中実習として8月8日～8月9日の2日間、病態人体解剖実習が行われた。これには医学部主催の人体解剖トレーニングセミナーで解剖されたご遺体が提供された。学生にとっては人体構造と機能の理解を深めるとともに、ご遺体に対する感

謝の念を通して人の命の尊厳を考え、将来の医療人としてのあり方を考えるよい機会となった。

平成 29 年度 2 年次編入学試験は 8 月 29 日（火）、大学院博士前期課程入学試験は 8 月 30 日（水）、同後期課程入試は 8 月 31 日（木）にそれぞれ実施し、リハビリテーション療法学専攻博士前期課程理学療法学分野に 10 名（一般選抜 9 名、社会人特別選抜 1 名）、博士後期課程理学療法学講座に 3 名（一般選抜 1 名、社会人特別選抜 2 名）が合格した。

9 月 27 日（水）には博士後期課程の論文発表会（予備審査会）が本館第 3 講義室で行われ、理学療法学講座からは 1 名の学生が発表した。

学年を超えた学生間、学生と教員が密に交流する機会として、9 月 24 日（日）から 1 泊 2 日の日程で岐阜県多治見市の文化施設「地球村」へ出かけて講演会、親睦会、バーベキューを楽しんだ。これには教員・学生合わせて約 50 名が参加し、専攻の絆を深めた。

第 8 回目となる韓国延世大学との学術交流会が企画され、本学の大学院生 2 名が開催地である延世大学原州キャンパスに赴き、11 月 1 日（水）から 8 日（水）にかけて学術交流と親睦を深めることができた。また、11 月 8 日（水）から 15 日（水）にかけて、延世大学の大学院生 2 名を本学大幸キャンパスに迎え、学術研修や国際交流を図る機会をもった。

秋学期授業では 4 年生の卒業研究の後半部分が再開され、11 月 29 日（水）に本館第 1 講義室において最終発表会が開催された。19 題の発表があり、教員ならびに在学生との活発な討論が交わされた。1、2 年生にとっては将来の自身の研究の参考になったと思われる。また、3 年生の卒業研究中間発表会は平成 30 年 3 月 9 日（金）に本館第 2 講義室で行われた。合計 24 題の発表があり、1、2 年生からの質問も多く、活発な発表会となった。

大学院では、9 月 27 日（水）に博士後期課程 3 年生 1 名を対象に、本館第 3 講義室で予備審査会を開催した。また、平成 30 年 2 月 8 日（木）に作業療法学専攻を含むリハビリテーション療法学専攻理学療法分野（博士前期課程）15 期生の修士論文ならびに博士後期課程博士論文発表会が行われ、理学療法分野から前期課程 8 題、後期課程 1 題、合計 9 題の発表があった。博士前期課程修了者は 8 名で、病院就職 5 名、一般企業への就職 2 名、博士後期課程進学者 1 名であった。博士後期課程満期退学者 1 名が学位を取得した。3 月 14 日（水）には前期課程 1 年生（16 期生）の中間報告会が行われ、理学療法分野から 10 題の発表があった。

2月25日（日）には理学療法士国家試験が施行され、本専攻学部平成29年度卒業生20名が受験した。3月26日（月）には保健学科第17期生の卒業式が執り行われた。本専攻は編入学生を含め19名の新卒業者を世に送り出した。そのうち11名が病院に就職し、8名が大学院（そのうち1名が他大学）へ進学した。

3月3日（土）には平成31年度大学院入学者のための大学院説明会が開催され、理学療法学講座説明会には、学生6名（他大学生1名を含む）、社会人3名、合計9名が参加した。

### 3. 研究活動

各教員の研究テーマは、以下のとおりである。

- 鈴木 重行 教授 : 筋ストレッチングの効果に関する研究、骨盤底筋群に対する理学療法効果、作業関連性筋骨格系障害のメカニズム検証、培養筋細胞を用いたカヘキシーに関する研究
- 山田 純生 教授 : 心不全のリハビリテーション介入、電気刺激による骨格筋分解抑制、フィットネスと疾病・障害予防
- 内山 靖 教授 : 姿勢・運動の制御と運動学習に関する研究、症候障害学、理学療法学教育に関する実践的研究
- 亀高 諭 教授 : 筋芽細胞の膜融合過程の調節機構、遺伝性痙性対麻痺の原因遺伝子群（SPG 遺伝子群）の機能解析、筋分化におけるオートファジーの役割
- 杉浦 英志 教授 : がん悪液質による二次性サルコペニアの疫学的研究、骨軟部腫瘍の術後再建術についての研究、ロコモ・フレイル・サルコペニアのレジストリ研究
- 石田 和人 准教授 : 脳出血モデル動物における中枢神経の病理変化と運動療法の効果に関する研究、運動による脳梗塞障害予防効果に関する基礎的研究、抑うつモデルの確立および理学療法効果の検証



李 佐知子 准教授： 脳血管障害後の痙性発症メカニズムの研究、大脳皮質損傷後の運動機能回復メカニズムの研究

野 野 一平 助教： ヒトを対象とした運動学習に伴う脳の可塑的变化の研究およびその臨床応用研究

井上 倫恵 助教： 骨盤底機能障害に対するリハビリテーションに関する研究

なお、本年度末に、鈴木重行教授、石田和人准教授が退職された。

#### 4. 対外的な、または社会と関わりのある活動

臨床実習指導者連絡協議会（スーパーバイザー会議）が7月26日（水）に行われた。内容は、臨床実習全般（理学療法イントロダクション、同コミュニケーション、臨床実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）についての報告と反省、臨床実習前の学内実習である基本的臨床技能実習試験（OSCE）の実際とその学習効果、さらに臨床実習Ⅱ、Ⅲについて本学の理念や目的と実習施設における実習目的との差などについて協議した。更に、後期より始まる臨床実習Ⅰ、理学療法コミュニケーション、同イントロダクションについて協議した。

専攻代表が出席した学外関係会議は、第19回国立大学理学療法士・作業療法士教育施設協議会（9月13日（水）、担当：鹿児島大学）であった。

毎年夏に催される名古屋大学・大学説明会（オープンキャンパス）は8月10日（木）に行われた。保健学科は大幸キャンパスを主会場とし、参加した高校生に保健学科全体の説明がなされた後、各専攻に分かれ、本専攻の特徴などについて主任の内山教授が説明した。本専攻の説明会には208名が参加し、教員と学生が施設を案内し、質問に答えた。質問も多く、高校生の興味の深さがうかがわれた。

10月26日（木）には地震防災訓練が行われ、保健学科全体で、教職員、学生が多数参加した。

（主任：内山 靖）

## リハビリテーション療法学専攻 作業療法学講座・作業療法学専攻（平成 29 年度）

作業療法学講座および作業療法学専攻(以下「本講座」という。)は、作業療法に関する学問体系の確立と高度専門職業人の育成、および教育者、研究者の育成を目的として設置された。本専攻は、作業療法士専門職教員と医系教員から構成され、各教員の専門を活かした教育・研究活動を通して作業療法学の発展に向けて鋭意努力している。作業療法学における脳神経機能とヒトの行為との関係や、新たな支援技術提案・開発、激変する超高齢化や少子化に伴う国内社会構造の多様化に密着した臨床研究など、作業療法学の専門性を活かした卒業研究や短期海外研修を通じて、高度な専門性と国際性を身につけた作業療法士の育成を学部 4 年教育の中で積極的に推進している。また、次年度以降に計画されている理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の改正の動向に即応し、学部教育内容の事前検討及び再考を迅速に進めている。また、新たな大学院教育の拡充に向け、保健・医療・福祉の領域に積極的に取り組める研究意識の向上と研究力など、作業療法学における高度専門技術・研究力を獲得するための研究活動を本講座教員の指導の下に積極的に推進している。平成 29 年度より具体的に推進されている保健学科専攻の教育カリキュラム再考と、保健学科・大学院医学系研究科の改組に向けた当講座としての将来構想の議論と構築など、当講座の保健学における位置付けを含めて理学療法学専攻と連携して模索検討を進めている。

### 1. 運営

平成 29 年度の本講座は、千島 教授（主任）ほか 3 名の教授、准教授 3 名、講師 1 名、助教 1 名の計 9 名の専任教員により構成されている。本講座の年度運営は、全教員が参加する専攻会議（毎週水曜日開催）によって学部教育および研究活動の具体的な年次進行に沿った活動方針を決定している。本会議では、本学の学年歴および保健学科の諸行事に合わせた年間行事、事業についての計画とその進行状況の、年度専攻予算に関する事案、学生の教育に関する事案（成績関連、単位認定、進級関連、国家試験関連、卒後進路など）、学部学生生活に関する事案、短期・長期の臨床実習に関する事案（実習計画、臨床実習施設との連携および実習施設指導者会議運営など）、その他保健学科全体の諸課題についての講座としての方針や考え方を討議決定している。特に個々の学生への指導など、具体的な教育課題について詳細な検討や課題解決への方策を合議により決定している。また、人事など教授専任事項については随時、講座教授会議にて審議している。本会議は構成メンバー全員の意見の一致を原則として運営されている。リハ

ビリテーション療法学専攻で密な連携関係にある理学療法学講座と共に毎月両講座会議（毎週第1・第3水曜日開催）を設け、両講座の全教員が参加し、共通する課題検討に取り組み、連携・協力を図っている。大学院運営の機構としては、両講座同席によるリハビリテーション療法学専攻会議を月に1回の定例で開いている。

## 2. 平成29年度大学院，学部の教育活動

作業療法学専攻の平成29年度入学学部学生は20名であった。選抜方法による内訳は、推薦入試で入学した学生は9名、前期日程試験で入学した学生は11名。性別では男子学生6名、女子学生14名であった。また、平成19年度より募集を開始している本年度2年次編入学生はなかった。なお近年の志願者の減少に鑑み、平成30年度入試より2年次編入学制度は募集停止することと決定した。

平成29年度の大学院博士課程前期課程作業療法学講座には4名。性別では男子学生2名、女子学生2名が入学した。内訳は、一般選抜による入学生は3名で社会人特別選抜による入学生1名であった。また、平成29年度の博士課程後期課程作業療法学講座には2名。性別では男子学生2名、女子学生0名が入学した。内訳は、一般選抜による入学生は1名、社会人特別選抜による入学生1名であった。

(1) 平成26年の入学式以後：学部新入生・編入生および大学院新入生のガイダンスを実施している。毎年度始めには新入生および編入生のみならず在校生各学年別に年度当初ガイダンスを実施し、当該年度における教育内容、学生生活に関する説明と確認を行っている。近年は、大学生活における安全衛生に関する諸注意、大学生として守るべき個人情報に関する注意事項など、情報化社会に対応した諸注意が重要であり、この点にも留意したガイダンスとなるよう努めている。大学における学修と生活の基本的内容については作業療法学講座および理学療法学講座と合同で行い、個別の内容について講座別にガイダンスを行っている。この時期、作業療法学専攻4年生については臨床実習が既に始まっているため、ガイダンスは前年度末までに実施することとしている。

(2) 平成29年4月15日（土）・16日（日）：通称「犬山ガイダンス」は、一泊二日の日程で行われる学部新入学生・在校生合同（臨床実習に参加している学部4年生を除く。）の年度当初ガイダンスである。本年度も昨年と同様に愛知県犬山市犬山国際ユースホステルで開催された。全教員、新入生、新2年生、新3年生が集合し、

教員紹介・学生紹介の後、専攻ガイダンスを実施した。新入の学部学生が円滑に快適で充実した学生生活を送るという目的で開催され、全教員や2年生3年生からの公私による示唆や助言などを通して実施された。夕食後新2年生を中心とした親睦会が行われた。同時に学年相互の交流・親睦を目的として種々のイベントを開催した。新2年生が編纂する小冊子が配布され、作業療法学専攻に関わる教員と学生間での親睦に活用された。入学直後に実施されている本ガイダンスについては、今後の実施目的を明確とした議論を進めており、実施継続に関する再検討を専攻内で協議を進めているところである。

(3) 平成29年4月3日(月)から8月11日(金)：4年生臨床実習の実施。学部4年生を対象とし最終年次前期期間中、学内外の臨床施設(名古屋大学医学部附属病院を含め62施設)にて臨床実習を行った。実習期間を3期に分け、臨床実習Ⅰ(身体障害分野)、臨床実習Ⅱ(精神障害分野)、臨床実習Ⅲ(発達障害分野および老年期障害分野)の医療機関・施設で臨床実習を行った。

- ・Ⅰ期：4月3日(月)から5月12日(金)に実施。臨床実習セミナーを5月15・16日に実施。
- ・Ⅱ期：5月22日(月)から6月30日(金)に実施。
- ・Ⅲ期：7月3日(月)から8月11日(金)に実施。最終臨床実習発表会を8月12日(土)に実施した。

4年生の学外臨床実習に際しては、各施設に担当教員を事前に配置し、学生の学修状況や体調、実習の進捗状況を把握するように努めている。個々の学生の実習進捗状況はメールおよび毎週の会議で報告され、問題の生じた事項については全教員で検討し、指導教員、実習担当教授、施設担当教員、実習担当教員が対応に努めた。

(4) 平成29年7月5日(水)：大学院博士後期課程2年次中間発表会。リハビリテーション療法学専攻2年生に在籍する大学院生7名(内、作業療法学講座4名)が研究テーマについての進捗状況を報告した。研究発表会では今後の研究方針について教員からアドバイスされた。

(5) 平成29年8月10日(水)：大幸キャンパス・オープンキャンパス開催。本キャンパスにおいて、保健学科全体では大学教育理念、大学院、アドミッションポリシーなどを、専攻別説明会では学内の作業療法学専攻関連施設を小グループに分割してツアー形式での説明会を実施した。説明会参加者に対して講義室や実習室等を案内し、本学における本専攻の教育理念、方針、具体的教育内容について教員より説明した。午前55名(昨年57名)、午後29名(昨年26名)の参加があった。保健

学科全体では総参加者 985（昨年 932 名）であり，愛知県・岐阜県・静岡県からの参加者が 8 割を占めた．本年度も保護者からの参加希望があった．次年度の開催は 8 月 10 日（金）で，本年度と同様に午前・午後の 2 回実施の予定である．

- (6) 平成 29 年 8 月 29 日（火）：学部 2 年次編入生入学試験．
- (7) 平成 29 年 8 月 30 日（水）：大学院博士課程前期課程入学試験．
- (8) 平成 29 年 8 月 31 日（木）：大学院博士課程後期課程入学試験．
- (9) 平成 29 年 9 月 8 日（水）：卒業研究中間発表会（学部 4 年生 22 名）．卒業研究の途中経過の報告と教員による指導の機会として実施された．
- (10) 平成 29 年 9 月 18 日～28 日：作業療法入門実習（学部 1 年生 20 名）．本専攻に入学してから最初の臨床場面に同席する実習となる．作業療法における主要な分野（身体障害分野，精神障害分野，発達障害分野，老年期障害分野）の関連の機関・施設 6 ヶ所の見学を中心とした実習を実施した．
- (11) 平成 29 年 9 月 19～12 月 6 日：作業療法基礎学実習（学部 2 年生 20 名）．作業療法の対象となる施設や対象者を理解する目的で 2 年後期に実施している．学生は，身体障害分野，精神障害分野，発達障害分野及び老年期分野の 4 領域の医療機関・施設のうち 38 か所で基礎額実習を実施した．学生 1 人あたり 1 か所の実習は 3 日間とした．
- (12) 平成 29 年 12 月 16 日（土）：卒業研究発表会（学部 4 年生 22 名）．卒業研究の最終発表会であり，続いて論文の編集・作成が行われた，本研究発表会の内容は「名古屋大学医学部保健学科作業療法学専攻 卒業研究論文集 第 17 巻」として発刊した．
- (13) 平成 30 年 2 月 5 日（月）：学部の推薦入学試験．
- (14) 平成 30 年 2 月 8 日（木）：リハビリテーション療法学 大学院博士課程前期課程および後期課程学位論文発表会．作業療法学講座からは博士課程前期課程 4 名の発表を行った．
- (15) 平成 30 年 2 月 15 日（木）：臨床実習指導者会議．4 年次に行われる臨床実習での実習協力施設の実習指導者を招いて，臨床実習指導者会議を開催した．次年度の実習展開について，当専攻で検討してきた従前からの臨床実習展開で課題となってきた学生負担軽減と指導教員の訪問指導負担の効率的な軽減に向けた再検討を行ってきた．次年度からの臨床実習指導の変更内容について臨床実習教授より本会において説明した．次年度からの実施にあたっては各期実施において，本学内指導の日を設け，学生と教員間で報告・検討会を実施することとした．学生から要望がある場合には施設担当教員との面談指導を可能とした．学生の課題としては，各期の学

内指導日の一週間前までに施設担当教員にメールにて実習の進捗状況，その時点での改善課題，対応が必要な問題点などを報告することとした．施設担当教員は以上の内容を学生との間で状況把握すると同時に指導を進める．また，施設担当教員は事前に施設において希望した訪問対応，電話対応，メール対応などの方法で，実習施設の指導者との間で学生の実習状況の把握に努め，調整及び指導を迅速に進められるようする旨報告した．また，会議では定例議題として平成28年度臨床実習報告を実施した．大学からの各臨床実習の到達目標設定と学生評価，長期の臨床実習に発展させる上での基礎学実習の重要性と進め方を再度説明し，次年度より実施する学内指導日を設けた実習計画変更の理解を説明した．最後に今後の実習についての本専攻教員と実習指導との間でディスカッションを行った．

- (16) 平成30年2月19日(月)：OSCE(客観的臨床能力試験)の実施．学部3年生(21名)を対象に実施した．
- (17) 平成30年2月25日(日)・26日(月)：一般選抜前期日程入学試験．
- (18) 平成30年2月25日(日)：理学療法士・作業療法士国家試験．本専攻から卒業予定者20名が受験した．
- (19) 平成30年3月3日(土)：大学院説明会開催．一般学生15名，社会人4名(計19名)の参加があった．
- (20) 平成30年3月14日(水)：博士課程前期課程中間発表会．前期課程1年在籍の13名(内作業療法学専攻3名)が研究の進捗状況を報告した．
- (21) 平成30年3月26日(月)：学部および大学院卒業式．本年度は学部学生22名(男性8名，女性14名)が卒業した．大学院リハビリテーション療法学専攻作業療法学講座では修士号3名(男性2名，女性1名)，博士号1名(女性1名)の取得があった．
- (22) 平成30年3月27日(水) 理学療法士作業療法士国家試験合格発表．本専攻21名が合格，1名が不合格であった．

### 3. 国際交流

- (1) 平成30年1月29日(月)から2月5日(月)：平成29年度名古屋-延世大学学術研究交流事業として，「2017 Yonsei-Nagoya University, Research Exchange Meetings in Health Sciences & Nursing」が延世大学大学院学生を招いて実施された．韓国 延世大学作業療法学大学より修士大学院生3名(M1：1名，M2：2名)

が訪名され開催された。作業療法学専攻の各教員研究室訪問及び近隣施設見学を中心に実施した。各教員研究室では当専攻大学院学生を交えて積極的に交流活動を進めた。例年同様に滞在期間を通じて本学大学院生が中心となり、各研究室訪問、学内見学、名古屋市内紹介等を計画して積極的な交流事業を展開した。

#### 4. 研究活動

本講座では作業療法各分野および基礎的研究各分野における研究が大学院教育とともに行われている。研究は教員による個人研究が中心であるが、企業や他施設との共同研究も積極的に推進している。今後の大学院教育の拡充を念頭に置いた改組計画が推されており、次年度計画を加味した今後の本学大学院教育の検討を進めた。

##### 4-1. 共同研究

- (1) 厚生労働省難治性疾患克服事業（スモン患者の QOL に関する研究：寶珠山・清水・上村・星野）
- (2) 厚生労働省科学研究事業（複合性局所疼痛症候群の評価に関する研究（寶珠山）
- (3) 日本語入力 BCI システムの臨床応用の研究（工学研究科）（寶珠山）
- (4) てんかん患者における脳磁図及び脳画像解析（医学系研究科・小児科，脳神経外科）（寶珠山）
- (5) 手の外科領域における感覚障害と疼痛緩和効果に関する研究（医学系研究科・手の外科，リハビリテーション部）（寶珠山）
- (6) ASD 児の情動的コミュニケーションを基盤にした作業療法の効果についての研究（花ノ木医療福祉センター）（辛島）
- (7) 中高年者の高次脳機能に関する長期縦断的資料を基盤とする神経心理学的研究（関西福祉科学大学）（伊藤）
- (8) 脳卒中患者の自動車運転再開に関する研究（公益財団法人丹後中央病院）（伊藤）
- (9) 高次脳機能障害者の実車運転における行動特徴に関する研究（名古屋市総合リハビリテーションセンター）（伊藤）
- (10) 革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト（医学系研究

科, 精神医学) (飯高)

- (1 1) 相互主体性の解析に基づく社会行動の神経基盤と発達過程の解明 (生理学研究  
所) (飯高)
- (1 2) 脳・生活・人生の統合失調症的理解にもとづく思春期からの主体価値発展学  
(東京大学その他) (飯高)
- (1 3) Resting State fMRI と脳波の同時計測によるケア手法の有効性検証プロトコル  
の開発 (長寿医療研究センター) (飯高)
- (1 4) 脳機能データ解析用ソフトウェアの開発 (メディカル・トライ・システム社)  
(飯高)
- (1 5) 摂食障害患者に対するリハビリテーションの開発とその効果検証に関する研  
究 (医学系研究科精神医学・医学部附属病院リハビリテーション部) (星野)
- (1 6) 外来統合失調症患者に対する認知リハビリテーションの効果検証 (医学系研究  
科精神医学・医学部附属病院リハビリテーション部) (星野)
- (1 7) うつ病女性に対するリハビリテーションの開発 (愛知医科大学・愛知淑徳大  
学) (星野)
- (1 8) 統合失調症患者の時間使用に関する研究 (医学部附属病院リハビリテーション  
部・楠メンタルホスピタル・北勢病院・心療センターひなが・松蔭病院・北津島病  
院・榊原病院) (星野)

#### 4-2. 個人研究

- (1) 自閉症スペクトラム児の情動的コミュニケーションを基盤とした作業療法の効果  
(辛島)
- (2) 特別支援教育・作業療法士と教員のための環境因子観察表の開発 (辛島)
- (3) 社会脳に関する fMRI 研究 (飯高)
- (4) 扁桃体と顔認知の脳画像研究 (飯高)
- (5) 安静時 fMRI を用いた精神疾患の補助的診断方法の開発 (飯高)
- (6) 精神疾患の脳画像研究 (飯高)
- (7) 運動と体性感覚誘発脳反応に関する研究 (寶珠山)
- (8) 安静時と課題時の脳磁図による脳活動解析 (寶珠山)
- (9) 重度神経疾患 (児) の生活支援に向けた新たな支援技術開発 (千島)
- (10) 脳波応用による生活支援技術の研究 (Brain-Computer Interface 研究) (千



島)

- (1 1) ヒトの運動情報処理機構と運動障害に関わる基礎的研究 (千島)
- (1 2) 学習における関節運動の変化に関する研究 (清水)
- (1 3) 感覚入力情報の違いが作業効率に及ぼす影響に関する研究 (清水)
- (1 4) 日常生活活動に及ぼす手指関節の可動域の影響に関する研究 (清水)
- (1 5) 高齢者の運転行動における自己統制に関する研究 (伊藤)
- (1 6) 高次脳機能障害者の実車運転評価に関する研究 (伊藤)
- (1 7) 体性感覚刺激に対する関連脳領域間の機能連関の経時的変化に関する研究 (上村)
- (1 8) 運動感覚イメージ課題による関連皮質領域ならびに皮質間連絡の賦活に関する研究 (上村)
- (1 9) 要介護高齢者の活動・参加に関する研究 (上村)
- (2 0) 作業療法老年期領域における活動・参加の評価法に関する研究 (上村)
- (2 1) 精神障害者の地域生活支援に関する研究 (星野)
- (2 2) うつ病女性の育児支援に関する研究 (星野)
- (2 3) 認知課題と子供の座位姿勢に関する研究 (五十嵐)

#### 4-3. 地域・社会活動

- (1) 平成 29 年 4 月～30 年 3 月 (継続) 愛知県作業療法士会機関紙査読委員 (辛島・伊藤・清水)
- (2) 平成 29 年 4 月～30 年 3 月 (継続) 名古屋市教育委員会特別支援教育指導室スーパーバイザー (辛島)
- (3) 平成 29 年 1 月～30 年 12 月 国立大学 PT, OT 教育施設協議会・理事 (辛島)
- (4) 平成 29 年 12 月～30 年 3 月 (継続) 福祉施設等リハビリテーション関連スタッフ交流会顧問 (辛島)
- (5) 平成 29 年 4 月～30 年 3 月 (継続) 日本作業療法士協会学術誌「作業療法」編集委員 (辛島)
- (6) 平成 29 年 4 月～30 年 (継続) 日本作業療法士協会 演題審査委員 (千島)
- (7) 平成 29 年 4 月～30 年 (継続) 日本作業療法士協会 事務局 統計情報委員会委員長 (千島)
- (8) 平成 29 年 4 月～30 年 (継続) 日本作業療法士協会 教育部・生涯教育委員会・専

門作業療法士審査班：福祉機器 審査班員（千島）

- （9）平成 29 年 4 月～30 年 3 月（継続） 名古屋市介護保険認定審査会（伊藤・清水・上村）
- （10）平成 29 年 4 月～30 年（継続） 日本作業療法士協会 教育部・生涯教育委員会・専門作業療法士制度班 班員（清水）
- （11）平成 29 年 4 月～30 年 3 月（継続） 愛知県作業療法士会機関紙編集委員（清水）
- （12）平成 29 年 4 月～30 年 日本作業療法士協会 学術部疾患別ガイドライン班班員（星野）
- （13）平成 29 年 4 月～30 年 精神疾患と認知機能研究会：M-Cog サテライトセミナー世話人（星野）
- （14）平成 29 年 4 月～平成 30 年 第 17 回東海北陸学会実行委員（星野）
- （15）平成 29 年 10 月～12 月 第 1～5 回愛知県作業療法士会現職者共通研修（五十嵐）

（主任：千島 亮）

<まとめ>

平成 29 年度の市民公開講座は、看護学専攻健康発達分野、地域・在宅看護学領域が担当しました。人生 100 年時代、急速な超高齢社会進展の中で「中高年の生活習慣病と認知症予防」というテーマに基づき、老年学を専門とする教員 2 名から興味深い最近の知見をご紹介します。

第 1 講は老年看護学領域の澁田英津子准教授から「認知症の予防とケア」について話題提供で、認知症高齢者が 2025 年には推計 700 万人になる予測のもとに認知症の症状やケア方法、生活の中で実践できる予防策について国内外の文献考察を踏まえて、根拠のあるお話を頂きました。

第 2 講は老年医学。糖尿病を専門とする林登志雄教授から「糖尿病の最新治療と認知症予防」について話題提供頂きました。糖尿病は実に恐ろしい病気であり、放置すると、身体各所にさまざまな合併症の併発や障害を招きやすいことを改めて実感する講義でした。食と運動による生活習慣改善の効果並びに糖尿病治療法の多様化と進捗状況についても大変わかりやすいお話を伺うことが出来ました。

今回は、これまでの参加者実績を上回りました。会場の参加者からは、2 つの講義に関して「時代のニーズに合ったテーマであり、自分の健康を考え直す機会になった」「認知症予防についてお話がわかりやすく、ためになった」「糖尿病にならないために今日の学びを活かしていきたい」というようなコメントや薬物治療についての考え方など多くの質問があり、有意義な時間を共有しました。

(平成 29 年度地域貢献委員会委員長：前川厚子)

第13回名古屋大学  
ホームカミングディ

平成29年度名古屋大学名古屋大学  
大学院医学系研究科(保健学)

## 市民公開講座

## 中高年の生活習慣病対策と認知症予防

後援：愛知県看護協会、愛知県診療放射線技師会  
愛知県臨床検査技師会、愛知県理学療法士会  
愛知県作業療法士会

名古屋大学大学院医学系研究科は昭和58年以来、大学での研究成果や知的財産を地域に還元することを目的として、健康や医療に関わるテーマで一般市民の皆様を対象にした公開講座を開催してまいりました。今年度は、「中高年の生活習慣病対策と認知症予防」と題する講座で2つの話題提唱をいたします。多くの皆様のご来場をお待ちしています。

- ◎開講日時 平成29年10月21日(土) 10:00～12:10
- ◎開講場所 名古屋大学大幸キャンパス 東館4階 大講義室
- ◎受講料 無料
- ◎定員 100名(事前申込制ですが、当日ご来校時に席の余裕があれば受講可能)
- ◎講義内容

司会進行：前川厚子（大学院医学研究科看護学専攻教授）

テーマ： 中高年の生活習慣病対策と認知症予防

### 第1講 10:10～11:00 「認知症の予防とケア」

（講師：湊田英津子・大学院医学研究科看護学専攻准教授）

### 第2講 11:10～12:10 「糖尿病の最新治療と認知症予防」

（講師：林登志雄・大学院医学研究科看護学専攻教授）

#### ◎お申し込み方法

- ・はがき、ファックス、または電子メールのいずれかでお申し込みください。
- ・お申し込みには、①氏名、②年齢、③性別、④職業または学校名を必ず記入してください。
- ※dんしめーるの場合、表題を「市民公開講座申し込み」としてください。

・締め切り：10月11日（金）到着分

※受講可能な場合、お申し込みはお返信は致しません、

#### ◎お申し込み先

〒461-8673 名古屋市東区大幸南1-1-20 名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）学務学生掛  
Fax：052-719-1506 E-mail [ihogakumu@post.jim.nagoya-u.ac.jp](mailto:ihogakumu@post.jim.nagoya-u.ac.jp)（申し込み専用）